日本歯科医史学会々誌・第27巻
第3号通巻104号・平成20年4月

「半日閑話」にみられる口中から芳香を出し続けた男の記述について*1

鶴見大学歯学部　佐藤恭道　戸出一郎　雨宮義弘*2

要旨：口臭についての記述は古来『医心方』『病草紙』『今昔物語集』などの文献にも記載が見られる．特に江戸時代には様々な歯磨剤が売られ，歯口清掃が庶民の嗜みになっていた．今回我々は，大田南畝の随筆『半日閑話』に見られる，口中から芳香を出し続けた男の記述について検索した．大田南畝は，寛政から文化，文政年間にかけて戯作や随筆などを著し当時の文壇に大きな勢力を持っていた文人である．『半日閑話』は，明和五年から文政五年の市井の雑事を記録した大田南畝の見聞録である．口中から芳香を出し続けた男の話は『天女降て男に戯るゝ事』として「松平陸奥守忠宗の家来の番味孫右衛門が，天女に口を吸われた後，一生涯口中から芳香を発し続けた．」と記されている．この記述は，口中から芳香を発することへの憧れによって創作されたものではないかと考えられた．またこの記述は，当時の口臭に対する世相を反映した興味ある資料と考えられた．

キーワーズ：半日閑話，太田南畝，口臭，芳香

Summary：In recent years there has been an interest in halitosis with various books describing how to remove it. People in the mid-Edo Period took a special interest in oral health as well. We examined "Hannichikanwa" by Nanbo Ohta, which described an account of a man who always emitted a pleasant aroma from his mouth. Ohta wrote many essays and stories during Edo Period. "Hannichikanwa" documents the various events of on the streets from 1768-1823. One story is about a man who was kissed by a heavenly maiden, which caused him to always have pleasant breath. This description is thought to reflect the social conditions relating to halitosis during the Edo Period.

Key Words：Hannichikanwa, Nanbo Ohta, Foul Breath, Aroma, halitosis

はじめに

近年，わが国では口臭に対する社会的関心が高まってきている．口臭抑制剤も多種多様な製品が発売され汎用されている[1,2]．口臭の除去については古来様々な方法が採られてきた．「医心方」には「諸病源候論」をはじめ10篇におよぶ文献からの引用が認められる[3]．また「今昔物語集」や「病草紙」などにも口臭に関わる記述が認められる[4,5]．特に江戸時代中期には様々な歯磨剤が売られて，庶民の嗜みとなっていた．

今回我々は大田南畝の随筆「半日閑話」にみられる，口中から芳香を出し続けた男の記述について検索したので報告する．

*1 A description of the man who always emitted a pleasant aroma from his mouth in "Hannichikanwa"

*2 Tsurumi University, School of Dental Medicine
Yasumichi SATO, Ichiro TODE and Yoshihiro AMEMIYA

なお本論文の要旨の一部は平成15年10月18日第31回本学会学術大会において発表した．

大田南畝と「半日閑話」について[6,7]

大田南畝（直次郎，覃：寛延二年 1749～文政六年 1824）は寛政から文化・文政年間にかけて幕臣として出仕する傍ら狂歌，戯作，随筆などを著し当時の文壇に大きな勢力を持っていた文人である．また山手馬鹿人，寝惚先生，四方赤良など多くの雅号，狂名，戯作者名を持ち晩年には蜀山人と号し，75 歳の長寿を全うするまで，多くの作品を表した（作品，年譜については大田南畝全集，岩波書店に詳しい）．

「半日閑話」は，明和五年（1768）から文政五年（1822）の市井の雑事を記した大田南畝の見聞録で，初め 22 冊「街談録」と称されていたものに，彼の没後，南畝のその他の文章と他人の文章を増補して「半日閑話」と題され，25 巻として流布している．

口中から芳香を出し続けた男の記述「天女降て男に戯るゝ事」について

「松平陸奥守忠宗の家来番味孫右衛門と云者，おのれが宅にて，座席に昼寝して居る処へ，天女天降りて孫右衛門が口を吸と見て，其儘辺りを見れども人気もなし，去迚は思ひも寄らぬ夢を見る物哉と思ひ，人に語らんもいと恥敷てぞ居けるが，其後よりして彼孫右衛門が物をいふ度に，口中異香薫じける程に，側に居ける人々是を不審に思へり．其身も不思議に思ふ処に，心安き傍輩の申様には，足下には怠ず深き嗜み哉，いつ迚も口中香しき事，唯々匂の玉を含るが如し，是奇特千万なりといへば，其時孫右衛門さりし時の有増事を語り，夫よりして如比といへば，彼友も奇異の思ひをなしけるとなん．扨孫右衛門事美男といふにもあらず，又は何のしほらしき事もなき男振なるに，いか成思ひ入有てか，天女はかゝる情をかけつらん，其源計難し．去れば其香一生身終る迄消ずしてかほりけるとなん．是田村隠岐守宗良の家来佐藤助右衛門重友が語る処如件．」との記述がある[8]．

松平陸奥守忠宗は伊達政宗の次男で二代目の伊達仙台藩主である．このことから，この話は寛永年間の話ではないかと推察される．またこの話をしたとされる佐藤助右衛門重友の主人の田村隠岐守宗良は忠宗の三男で伊達藩の支藩である一関藩の初代藩主である．よってこの話は，南畝の時代から約 150 年前の話ということがわかる．

考　　察

南畝は誰からこの話を聞いたのであろうか．「半日閑話」には他の仙台藩事情も見られることから，仙台藩や一関藩の勤番武士からの聞き語りが考えられる．また昌平坂学問所で日本各地の奇談を記した古賀侗庵主催の「今斉諧」には，南畝の友人で学問吟味を一緒に受けた中神君度（守節）や仙台の怪談を記した者（千葉平格）の名が見られる[9]．滝沢馬琴や同じ幕臣の根岸鎮衛などの交友関係も考えられる．同様の記述は無いものの，彼らの著作「兎園小説」や「耳嚢」などには様々な奇談が記されている．しかし 150 年もの間語り継がれていくような話であろうか．

むしろこの話は，南畝の創作ではないかと考えられる．番味という姓は「日本苗字大辞典」[10]に記載がなく，架空の人物であろう．「半日閑話」中には他にも奇異な話の記載が見られるし，やはり交友のあった上田秋成の「雨月物語」や江戸中期から流布されるようになった「今昔物語集」などの影響も考えられる．また「半日閑話」には「（太平）聖恵方」や「広恵済急方」などの医書，「半井家」や「医学館考試」に関する記述，また「楊枝」や「歯固め」，浅草の歯磨剤商人松井源水など，医学歯学に関する記述も散見できる．これだけ造詣のある南畝であれば簡単に創作できたのではなかろうか．鈴木桃野の著した「反古のうらがき」には，著者の祖父が衣冠の官人が天から降りてきたのを見たという「官人天より降る」との文がある[11]．この鈴木桃野の父鈴木白藤は，南畝と親交があり，前述の「今斉諧」にも名を連ねている[9]．狂歌や狂詩の多くはいわゆる本歌取りであり，南畝も非現実的なことを真面目なふりをして書いたのかも知れない．

この時代，「半日閑話」だけではなく例えば「耳嚢」にも歯科的な記述が多く見られる[12]．それだけ江戸の人々は口中の諸事に心をくだいていたのではないかと考えられる．特に江戸時代中期以降の江戸では歯磨きを好んで使っており，磨き砂や滑石に香料として丁字や龍脳などを加えた歯磨剤が普及し盛んに用いられていた．服装を整えるのと同様に口中にも気をくばっていた．また引札や

黄表紙に著名な文筆家の宣伝文を掲載して販売促進を図ったとも言われている．その中に南畝と交友のあった，平賀源内，山東京伝やその弟子の滝沢馬琴らも含まれている[13]．こうした状況の中で南畝が自著にこの話を取り入れたのではないかと言うことは想像に難くない．また，この話は近代まで有名であった様で昭和10年に中国や日本の古典，神話，伝説，民話などから一万余の話を収録した「大語園」にも「天女降臨」として紹介されている[14]．江戸から明治，大正，昭和と時代が移り変わり社会環境が変化しても，口中から芳香を発するということへの憧れが不変的であったことの現れと考えられる．

ま と め

大田南畝の著書「半日閑話」の「天女降て男に戯るゝ事」について紹介して考察を加えた．

江戸時代における口臭に対する奇談として著されているが，口中から芳香を発するという記述は江戸の風俗や流行を基礎に南畝の交友関係や自身の才覚などがあいまって創作されたのではないかと考えられた．またこの記述は，当時の口腔衛生に関する世相を知る上で特筆すべき資料であると考えられた．

文 献

1) Lawrence Baily：Direct plaque removal a pre-brushing dental rinse. Clin Prev Dent 11：21-27, 1989
2) 八重垣健，末高武彦：洗口剤の口臭産生に及ぼす影響．歯学 76：1492-1500，1989
3) 丹波康頼：医心方　日本医学叢書活字本，オリエント出版，大阪，1991年1月（影印），101-102
4) 今昔物語集　日本古典文学大系22，岩波書店，東京，1959年3月，149-151
5) 屋代正幸，藤野珦男，小林一日出ほか：「病草紙」にあらわれた歯科疾患風俗に関する一考察．歯医史 20：216，1995
6) 玉林晴朗：蜀山人の研究，畝傍書房，東京，1944年6月
7) 大田南畝：半日閑話　日本随筆大成　第一期8，吉川弘文館，東京，1975年8月
8) 大田南畝：半日閑話　大田南畝全集　第11巻，岩波書店，東京，1988年8月，180-181
9) 高橋明彦：昌平黌の怪談仲間．江戸文学 12：1994
10) 丹羽基二　編：日本苗字大辞典，芳文館，東京，1996年7月
11) 鈴木桃野：反古のうらがき　日本庶民生活史料集成第16巻，三一書房，東京，1970年10月，646
12) 根岸鎮衛：耳嚢　日本庶民生活史料集成　第16巻，三一書房，東京，1970年10月，279-626
13) 長谷川正康：歯の風俗史，時空出版，東京，1993年11月，107-120
14) 巌谷小波　編：大語園　第6巻，名著普及会，東京，1976

著者への連絡先：佐藤恭道
〒236-0052　横浜市金沢区富岡西2-12-19
Tel　045-773-4771